

一身田には、寺内町と呼ばれる古くからの町があります。かつて寺内町は専修寺を中心とした自治都市として栄え、町を囲む形の環濠は今でもほぼ完全な形で残っています。

その寺内町の中心である専修寺の南面には、正門である巨大な二階建ての山門があります。その山門前を東西に走る道を隔て、南に延びる石畳のある道を進んでしばらくすると、道幅を狭めるように両側に釘貫門と呼ばれる塀のような瓦葺



釘貫門と堀に架かる石橋



石橋

きの建物があります。さらにその先の堀には、小さな石橋が架かっています。

石橋は、専修寺とその子院のある寺内(寺領)と、寺下(町屋)を隔てる堀の上に架かり、緩やかな弧を描く橋板11枚から成る石造りの反り橋です。南側の橋詰めでは、高欄が親柱から水路に沿って折れ曲がっています。建設時期については、「高田史料」第三巻の宝暦10(1760)年編に、「三月八日、山門前石橋成ル、初渡式」との記述があります。



その石橋の内側にある釘貫門は、柱を立てて並べて横に貫を通しただけの簡単な門です。現在は、この山門前の釘貫門が残るのみですが、宝暦年間(1751~1764年)の木版画には他に3力所の釘貫門(矢来)が描かれています。当時の姿をとどめる釘貫門は、現存する貴重な例として、石橋とともに津市の有形文化財(建造物)に指定されています。

毎年1月のお七夜や11月の一身田寺内町まつりでは、この辺りを多くの人々が訪れ、にぎわいを見せます。当時のにぎわいと重ねながら、一緒に歴史を感じてみてはいかがでしょうか。

(「広報津」平成24年11月16日号)